

# 郷土芸能フェスティバル

平成30年11月25日(日)  
 会場：市民体育館 駐車場  
 (雨天時は、市民体育館内で開催します。)

出演芸能 ※時間は多少前後することがあります。

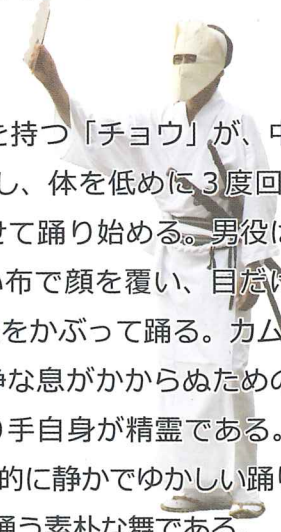
第1部	9:30	安納棒踊
	9:45	種子島大踊
	10:00	古田棒踊
	10:15	洲之崎どすこい
第2部	11:30	寺之門花踊
	11:45	住吉源太郎踊
	12:15	古田獅子舞
第3部	13:45	兵児踊
	14:00	田之脇棒踊
	14:15	ヨンシー踊
	14:30	横山盆踊

主催 西之表市 共催 西之表市教育委員会  
 後援 西之表市無形民俗文化財保存連絡協議会



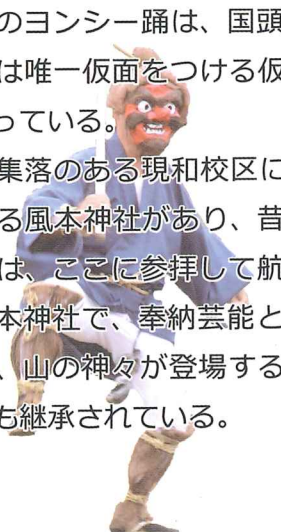
●由来  
 横山盆踊の成立は、室町時代といわれている。歌詞から京都や江戸の影響を強く受けていることは分かるが、正確な由来は不明。かつては12曲演奏されていたようだが、現在は6曲のみ。3曲目の「阿久根千代女」は、横山独自の演奏曲であり、その由来は明らかである。寛永5年(1628年)、宮崎県高岡の地頭比志嶋國隆(島津藩家老)は、悪政を理由に種子島に遠島となった。國隆の愛妾阿久根出身の千代女は、國隆を追って単身(実際は船頭と)種子島に渡り、上西横山に住んだ。それから9か月後、國隆は切腹を命じられ、その時、千代女も殉死した。國隆51歳、千代女35歳。横山の人々は二人の死を悼み、特に千代女の節婦としての心情を忍んで毎年7月第3日曜日にその霊を祀り、歌と踊りを奉納するようになった。

●特徴  
 七夕飾りの笹竹を持つ「チョウ」が、中央で「チョウー」と合図し、体を低めに3度回ると、踊り手が歌に合わせて踊り始める。男役はカムキ(面)という白い布で顔を覆い、目だけ出して踊り、女役は花笠をかぶって踊る。カムキは、清浄な霊に人の不浄な息がかからぬための覆いであり、同時に踊り手自身が精霊である。霊への畏敬を込めた全体的に静かでゆかしい踊りであり、先祖供養の心が通う素朴な舞である。



●由来  
 藩政時代に、琉球と交易の盛んな村であった庄司浦集落は、船乗りを家業とする者も多く、帆船を操って盛んに琉球航海をしていた。琉球との貿易が盛んであった当時は、初秋(9・10月頃)の北風の吹く頃、鹿児島港や赤尾木(西之表)港を出港し1ヶ月余りかかって琉球へ渡り、翌年の初夏(5・6月頃)に南風で帰路に着いたと伝えられている。この長期滞在の間に沖縄で習い覚えて持ち帰ったのがヨンシー踊である。  
 踊りのルーツは、琉球王の御殿「首里城」建築の際に、与那覇岳の中腹に位置する「長尾山」から木材を切り出し、首里まで運ぶ様子を表現した木遣り歌「国頭サバクイ」であるといわれている。

●特徴  
 種子島のヨンシー踊は、国頭サバクイ系の芸能の中では唯一仮面をつける仮面芸能としての特色をもっている。  
 庄司浦集落のある現和校区には、鎮守神として風を祀る風本神社があり、昔から薩摩や琉球旅の折には、ここに参拝して航海安全を祈っていた。風本神社で、奉納芸能として踊られるようになり、山の神々が登場する神事的な踊りとして、今も継承されている。



●由来  
 今から133年前(明治18年)、山川から岳之田地域に移住してきた松木甚助氏によって、山川にあった棒踊を岳之田地域に伝承し、その後に縁故関係にあった田之脇地域に伝えられたといわれている。

●特徴  
 服装は、頭に白くて長いハチマキと色違いの鮮やかなタスキがけ、腰に黄色の帯、白いズボン下を履き、前掛けをして、足はケハンに手製のワラジを履く。それぞれ六尺の棒、三尺の棒を持って踊りを披露する。





## 兵児踊

現和西俣



## ●由来

明治 35 年頃、宮崎県より丸太という兄弟が、椎茸の栽培をするため、現和の西俣に移り住んでいた。この兄弟が良い踊りを知っているとのことで、それを西俣の若者に教えて欲しいと頼んで教わった踊りである。

## ●特徴

太鼓の音をトン、拍子木の音をキャッキヤーと表し、この踊りを「トンキャッキヤー」ともいう。種子島の他の踊りには見られない、一種独特の「ひょうきんさ」と「こっけいさ」をもつ踊りである。終わりの引庭ひきにわは、テンポを早めながら、最後の一人が引くまで繰り返す。



## 古田獅子舞

古田



## ●由来

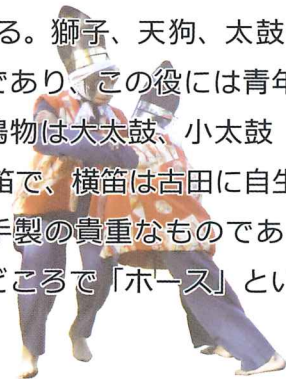
明治時代の末、大分県から椎茸栽培のために古田に移住してきた、川野幸太郎、石井又蔵の両氏が地区民に伝えたもの。

大正3年に、大正天皇御即位記念として初めて披露され、以来毎年 10 月に行われる豊受神社とようけの願成就かぐらに神楽として奉納されている。

## ●特徴

獅子舞は、獅子 2 人、天狗 1 人、猿 2 人、太鼓 2 人、笛 10～15 人で舞う。はじめは獅子を相手に天狗が茶化す。やがて獅子が怒って天狗におそいかかる。獅子と天狗の激しい争いが続き、1 度天狗が負けるが、やがて活気づき、刀と軍配の巧みなあやつりで、終わりには獅子が力尽きて後退していく。猿はそれぞれ獅子、天狗側につくが、一定の舞の形はなく、獅子及び天狗の動作をまねしながら、時々猿どうし争う。舞の道化役を演じる。

舞終わったあと、獅子は 1～2 歳児の頭を魔よけのため噛んでやる。獅子、天狗、太鼓は、かなりの体力が必要であり、この役には青年たちがあっている。鳴物は犬太鼓、小太鼓（2 人で交互に叩く）、横笛で、横笛は古田に自生するニガタケで作り、手製の貴重なものである。歌詞はなく、ところどころで「ホーヌ」という掛け声をかける。



## 住吉源太郎踊 (げんだら踊)

住吉本村



## ●由来

歌詞の二番に「山口くだりの源太郎よ」とあるところから、源太郎踊というようになったらしい。源太郎踊は、住吉に古くから伝承された後、島内各地に広がった。いつ頃、住吉に伝えられたかは、はっきりしないが、その歌詞や踊りから、室町時代から江戸時代初期までに伝わったと思われる。

## ●特徴

いくつもの歌詞から構成された 7 つの踊りからなり、それぞれ独立した曲、踊り方であることが特徴。総勢 60 余人で踊られる集団芸能は、優雅で絢爛けんらん、そして歌曲、踊り方、隊形の変化の多い洗練された踊りであり、人々の目を楽しませる。

住吉神社での願成就 奉納は、6 年に 1 度（深川めん踊と 3 年おきに奉納）となっている。





- 1 寺之門花踊 (国上寺之門)
- 2 洲之崎どすこい (榕城洲之崎)
- 3 横山盆踊 (上西横山)
- 4 安納棒踊 (安納軍場)
- 5 ヨンシー踊 (現和庄司浦)
- 6 田之脇棒踊 (現和田之脇)
- 7 兵児踊 (現和西俣)
- 8 種子島大踊 (現和武部)
- 9 住吉源太郎踊 (住吉本村)
- 10 古田棒踊 (古田)
- 11 古田獅子舞 (古田)



## 寺之門花踊

国上寺之門



### ●由来

古くからの言い伝えでは、約 600 年位前、都のおちうど落人が国上の浦田に上陸し、寺之門付近に住み始めた。彼らが都への思いを、この踊りに託して伝えたといわれる。

元来、大踊であり、太鼓を下げた 50 人の男で踊られていたが、寺之門特有に変化してきて、今の形となった。

### ●特徴

踊りのテンポは極めてゆるやかで、種子島の踊りの中でも最も優雅といわれている。全体の踊りの根底は、早苗植えの所作で、早苗を象徴とした花を持って踊る。

また、厄病退散を祈る「やすらえ花」「花しずめ」の踊りに、「花祭り」「灌仏会かんぶつえ」の要素も加わって、単純化された中にも気品がうかがえる。



## 洲之崎どすこい

榕城洲之崎



### ●由来

今から約 150 年前の江戸末期 (慶応年間)、今の三重県から洲之崎を訪れた人によって伝えられたといわれ、当時の 25 代島主種子島久尚公ひさたかの御前でも披露された。

また、大正元年に集団赤痢が発生したときに、病魔退散 祈願のため八坂神社境内で奉納している。

### ●特徴

どすこいは、「角力とり節すもう」ともいわれ、全島数か所に分布し伝承されているが、洲之崎のものは、歌詞が違い、踊り、歌ともにしっかりしている。それは、はじめ島主に見せるために、踊ったからだ、いわれている。



## 古田棒踊

古田



### ●由来

日置郡から安城に移住後、古田に住むようになった上妻次郎氏が、大正 10 年、当時青年会員の上妻静馬氏等に教えたのがはじまりである。

その後、毎年古田の豊受神社とようけの願成就の余興として踊り伝えられたものである。

### ●特徴

入場・棒突き・踊り 1 回目・踊り 2 回目・退場で構成される。

歌や囃子はやしに合わせて踊り、棒と鎌との打ち合いが特に激しく、速くて勇ましいテンポのよい踊りである。





## 種子島大踊

現和武部



## ●由来

鎌倉から伝わったと伝承されているが、室町時代に種子島公が度々京都に行った際、関西地方の踊りを家来たちに習わせたものともいわれ、400年以上も前からある踊りである。

## ●特徴

種子島の大踊は、太鼓で両バチを叩く「百姓踊」と、太鼓を片バチで叩く「武士踊」の2通りに大別できる。

武部の大踊は、百姓踊の系統だが、武士踊の姿も一部に見られ、むしろ大踊が2つに分化する前の姿をとどめている。

武部の大踊は、8つの踊りからなるが、現在でも全てを踊ることができる。また、1つの踊りでは「寄せ」「出端」「本踊」「崩し」「引端」の5つで構成されている。



## 安納棒踊

安納軍場



## ●由来

棒踊は種子島各地にあるが、いずれも鹿児島本土より明治になって移入してきた芸能である。

安納の棒踊は、明治末期頃、旧始良郡加治木町から安納軍場に移住してきた大工 石野政蔵氏から習い、伝承してきたもの。

## ●特徴

棒踊の良さは、激しい太刀さばきと一糸乱れぬ集団美にある。元来、種子島の芸能は優雅でおおらかである点に特色があるが、薩摩示現流じげんの気合のこもった棒踊も、種子島に定着した。島内の棒踊よりテンポが早く、棒の間に鎌が入っている。

種子島の  
郷土芸能

種子島は「民俗芸能の宝庫」といわれるほど多くの芸能がある。

日本書紀には天武十年(681)「多禰島の<sup>あ</sup>人等を飛鳥寺の西の河辺に饗へき。<sup>くさくさ</sup>種々の<sup>がく</sup>楽を奏しき。」と記録されており、種子島の<sup>へんせん</sup>芸能の歴史は奈良時代まで、さかのぼることができる。奈良、平安、鎌倉時代と変遷するにつれて、各時代の各種芸能が流入し、今日の豊かな民俗芸能の島に発展してきたのである。

種子島の民俗芸能は、種子島大踊(安城踊)・源太郎踊等の大踊、どすこい・なぎなた踊等の中踊・小踊、それに座敷舞、盆踊、<sup>さむらい</sup>狂言、土踊、町人踊などに区分される。

かつて、百数十あった民俗芸能も、現在、過疎化による踊り手の減少、生活様式の変化などで、年々その数は減少しつつある。

種子島の芸能の多くは、10月に行われる願成就(豊作を神に感謝する祭)で披露される。この日は集落総出で料理を持ちより酒をくみかわし、各集落に伝わる民俗芸能を奉納しあい、楽しいひとときを過ごす習わしである。願成就は種子島人の心を表現する農漁村最大のカルチャーフェスティバルといえる。